7　可算性

英語学習者用の辞書には，ある名詞が可算名詞か不可算名詞かについての記述がある。そのためか，英語の名詞の可算・不可算の区別は本来的・固定的に決定されていると考えられているかもしれない。例えば，本（book）は，個体の境界線が認識でき，その「数」を数えることができるため，可算名詞の扱いがされることに違和感はない。一方で，水（water）の場合は液体のため明確な境界線を認識しにくく，「数」の観点から認識することが難しいため不可算名詞と扱われることも納得できる。

「本」や「水」にこのような特徴が本来的に備わっていることは疑いようもない事実であろう。しかし実際の言語使用においては，言語主体（である人間）の事態の捉え方（construal）によって，本来的用法とは異なる言語形式が選択されることがある。例えば，一般的には可算名詞と考えられる名詞であっても，実際には不可算名詞として扱われることがある。これに関してLangacker（2008）では次のように記述されている。

（1）..., the count/mass distinction reflects our capacity for conceiving and portraying a situation in alternate ways. The dexterity we exhibit in this regard has the consequence that categorization is rather fluid. In one way or another, probably every noun can be used in either manner.　（Langacker 2008: 142）

Langacker（2008）の表現を借りれば，事態の捉え方の違いによって可算・不可算の流動性が生じるということであるが，では「どのような捉え方をしたときに可算・不可算の違いが生じるのか」が問題になってくる。

そもそも数えられるためには，ある対象が他の存在と区別できる明確な「境界線」があり「個別性/個体性」が認識できなければならないと考えられる。例えば，卵（egg）は一つ二つと数えることができる。これは卵が明確な境界線を持ち個別性/個体性が認められるため，一般に可算名詞として扱われる理由であると説明できる。つまり，ある名詞が可算名詞として使用されるためには，言語使用者が対象物に明確な境界線を認め個別化するという「捉え方」が必要であるということである。逆に言えば，ある対象に対して，明確な境界線を認めず単一の個体として捉えていない場合，通常は可算名詞として扱われる名詞であっても不可算名詞として使用されるという予測ができる。この点についてもeggの例で考察してみよう。

（2）a. I had *a boiled egg* for breakfast.

b. You’ve got *egg* all down your tie.　（石田 2002: 64）

（2a）のa boiled eggは，原形を留めた一個のゆで卵として認識されているため，可算名詞の形をとっている。一方（2b）のeggは，丸ごと一個の卵ではなく「卵の食べかす」を意味している。つまり，卵の形が原形を留めておらず，もはや明確な境界線を持つ存在として認識されていないことが不可算名詞扱いになっていることから理解できる。

さて，上記の場合，卵が原形を留めているかいないか（言い換えれば，明確な境界線が認められるかどうか）で可算・不可算の違いが生じていたが，いずれにしても「何かしらの目に見える形」で存在が認識される例である。しかし実際には，個体物が原形を留めないどころか，形すら認識できず，したがってその存在が認められない抽象的なレヴェルで概念化された結果，可算名詞が不可算名詞として使用されていると考えられる例も存在する。これについても同様にeggの実例を基に検討してみる（以下は研究書などに挙げられている「例文」ではなく，地の文で使用されている「実例」である）。

（3）French speakers, for example, often fill their pauses with the vowel sound that starts with their word for egg *–oeuf–* a sound that does not occur in English.

（Fromkin et al. 2007: 9）（下線は筆者による）

この例において，eggは具体的な存在物としてとらえられているのではなく，抽象的な概念としてのEGG（卵というもの）という捉え方がされていると分析できる。言い換えれば，eggという同一の名詞の指示対象が，さらに抽象度の高い階層に属しているタイプ（type種のレヴェルで捉えられた対象）として概念化されている例と考えられる。この概念的階層関係は，（2a）がタイプを具現化した例であるトークン（token）として認識されていることと対照的である。

これまでの議論をまとめると，名詞における可算・不可算の区別は，その名詞に内在的に備わった属性というよりもむしろ，言語主体がその対象を明確な境界線を持つ単一の個体としてとらえているかどうかに依存すると結論付けられる（詳細は久野・高見（2004），西村編（2018）第2章を参照）。

（川﨑　修一）